

SSKO

NPO法人 共に歩む市民の会 会 報



2021年11月15日 発行

共に歩む市民の会広報委員会
横浜市旭区鶴ヶ峰2-2-4
☎045-453-8386

<http://tomoni-people.net/>

【旭区社会福祉協議会（旭区社協）が大事にしていること】

旭区社会福祉協議会事務局長 若尾 恵子

旭区社協は「すべての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる『地域共生社会』を実現する。このため、支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、福祉などの地域の公的サービスと協働して助け合いながら暮らすことのできる仕組みを構築する」（ニッポン一億総活躍プラン）という「地域共生社会」の理念を地域の皆さんと共有し、実現に向けた取組みを進めてきました。

そこへ突然襲ってきた新型コロナウイルス感染拡大。区社協ではコロナ禍により生活困窮に陥ってしまった方を対象として「生活福祉資金特例貸付」の受付をしています。令和2年3月から現在に至るまで、4,600件余りの申請がありました。本来の生活福祉資金の貸付は、相談を受け、ご本人の自立支援と一緒に考えながら貸付に至るのですが、この特例貸付は感染予防に加え一刻も早く資金を交付するために、多くは郵送による書類提出で、一度もご本人に会わずに受け付けをしています。それでも、年金と就労収入で生活していた高齢者、ひとり親、単身の若者、働き盛りの方、外国籍の方など、コロナ禍のため様々な理由で突然困窮状態になり、地域からも孤立していることが書類から垣間見えます。

地域共生社会の実現を目指す中で、生活に困りごとを抱えている方の増加と、その根底に「社会的孤立」という大きな課題があることを、民生委員児童委員や地区社協の方たちと共有してきましたが、どこかで他人事感があったように思います。しかし、特例貸付けの状況をお伝えしたことで、コロナ禍で困窮に陥っている方が、自分たちの地域にも実際にいるのだと「気づき」、「何かできることはないか」と活動が始まりました。

民生委員児童委員は、区内農家の方々から提供される野菜を届けることを通して、地域から孤立しがちな方と継続して関係を築く取組をしています。（つながり食料支援事業）

地区社協では「地元で応援してくれる人がいる」「身近に相談できる場所がある」ということを困っている方に知ってもらいたい、という思いで、「食料品等無料頒布会及び生活相談会」の開催が続いています。（3月万騎が原地区、6月二俣川地区、8月上白根地区、10月笹野台地区、11月さちが丘地区と旭北地区、さらに1月希望が丘東地区、3月に鶴ヶ峰地区で予定されています。）



また、地域の方が抱える困りごとに早期に気づき、支援につなげられる見守りの仕組みづくりも、それぞれの地区にあった実施方法の検討が始まっています。（ご近助ほっこり活動）

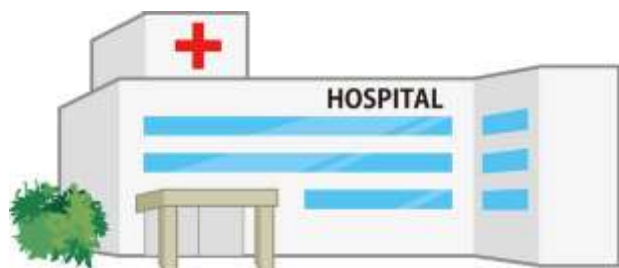
これらの取組みは、まさに地域の困っている方を「我が事」として「丸ごと」受け止め、「お互い様」の気持ちで取り組んでいるものです。コロナ禍で“密”を避けることが強調され、それまでの活動が止まった時期もありましたが、旭区では地域の皆様が「支え合いながら、自分らしく活躍でき」、一方で「たすけてと言え

る」地域コミュニティに向けて取組みが進んでいます。

旭区社協はこれらの想いを大切に、これからも「地域で支え合い、安心して暮らせるまちづくり」を地域の皆様とともに推進していきます。

【 精神科病院に入職して、今思うこと 】 ※2006年から精神科病院と呼ぶことになっています

医療法人誠心会 総合支援センター副センター長 今野利絵（会員）



私は今年いっぱい28年半勤めた誠心会という法人を退職します。職場が旭区にあり、横浜市西部地域やそこに住む人達とのご縁ができて、そのおかげで今まで何とか仕事を続けることができました。

入職当時初めて訪れた病院は、良く言うと年季が入った、悪く言えばおんぼろの建物で、今から考えると不用心ですがドアの開いている相談室には灯油ストーブがついていて、職員が誰もおらず職員と思った人は作業所職員で、自分の職場でもないのにお菓子を勧められました。そんな今からは考えられない程のんびりした環境の中私は精神業界へデビューしました。実はその相談室の先輩が田中所長です。

その当時は精神保健福祉士や“共に歩む市民の会”もまだなく、病院内のアメニティも悪く、畳敷きの大部屋に長期入院の患者さんが大勢いましたし、開放病棟も不活発な印象でした。薬やそれ以外の治療法の種類は限られており、なにより「精神病院は怖い」「汚い、暗い」といったイメージが独り歩きし、一度入るとなかなか出られない場所とされていました。

昔、治療を受けた方の中には、この体験がトラウマになって治療や病気の否認など負の影響を受けられた方も多くいるはずで、また実際、退院したとしても生活場所や日中活動、就労の場など、いわゆる社会資源も乏しい時代で、当事者やご家族の方は大変、ご苦労されていたと思います。しかし横浜では1982年に地域作業所が、1990年にグループホームが設置され…この40年で少しずつ変化してきました。国や自治体の制度改革、新しい薬の開発なども続き、特にこの20年間ほどの変化は目覚ましいものを感じます。私個人としては、その時期に旭区という場所で、当事者の方やご家族、他機関の支援者と関わったことは、本当に幸せでした。

1997年“たまり場”“共に歩む市民の会”がスタートし2005年“ほっとぽっと”と一緒に創り上げてきたことも大きな収穫でした。この間に精神科病院を取り巻く環境も変わりました。多くの病院が建て替え時期を迎え、新築病棟はきれいで明るく個室が多く、設備・サービス・治療メニューも充実し、患者の権利・情報開示も配慮され携帯やPC機器の持ち込み可能な病院も増えました。2004年国から精神保健医療福祉の改革ビジョンで「入院医療中心から地域生活中心へ」と基本理念が明示されました。

日本は、1958年に作られた「精神科特例」で、医師数、看護師数が一般病床より緩い基準になっており、その代わりに診療報酬は低く設定されていたことも長期入院の一因になっていました。しかし現在は、救急・急性期医療、リハビリ・生活支援、地域移行が地域精神医療の中心です。24時間救急、地域移行、福祉介護との連携などが評価され、逆に行動制限最小化、感染症対策、精神科専門療法などの良質な医療の提供ができない場合は減収になります。課題として、医師や心理士が患者さんと丁寧に関わるための精神療法やカウンセリング、精神保健福祉士の地域支援活動など、大事な部分の報酬はまだ不十分です。地域に頼りになる良質な医療があり、生活の安心を支えることはとても大切で、病院も地域の一員として必要な時に必要な支援を提供するところが変わりつつあります。それにはいつも開かれた場所でなければなりません。

このように変遷してきた精神科医療とそれを取り巻く環境ですが、私の勤める法人でもまさに同じ展開で

病院の建て替え、救急医療・専門病棟・作業療法の充実、訪問看護・福祉サービスの運営（グループホーム、生活訓練施設、就労支援施設等）、クリニック開設と、就職当時には考えられなかった広がりになりました。その中で、まだ精神保健福祉士の資格がない頃から、病院相談室→デイケア（2ヶ所）→計画相談事業所と医療から地域へ少しずつ近づく形の異動をして、結果的にとても豊かに働くことができたと感じています。むしろ利用者や他の支援者の方から、気づかされたり、励まされたりとあまりお役に立てず、自分ばかり得をしたような感覚です。そして、初めて私が来た当時の病院の相談室のように少し不用心でも、いつも扉が開いている、外に開かれた病院（法人）であってほしいなと願っています。それは地域の方々も同じ思いではないでしょうか。

【旭区地域生活支援フォーラムのご案内】オンライン（Zoom）開催

今年のテーマは、『助けて！』と言える地域づくり！

～障害のある人も孤立しない暮らしに向けてなにができるか？～

【日時】 2021年12月11日（土）13:00～15:30

NPO抱樸（ほうぼく）奥田知志（おくだともし）さんより基調講演（録画配信）、後半のシンポジウムでは、一人暮らしを実践している当事者の又村大地さん、鶴ヶ峰地区社会福祉協議会会長の佐藤進さんを迎え、旭区で孤立せず、安心できる暮らしの実現に向けてみんなで何ができるのかを考えていきたいと思います。

別紙チラシをご参照の上、奮ってご参加申込みをお願いします。

【鶴ヶ峰ってこんな町】

理事 國井淳子（鶴ヶ峰地区社会福祉協議会 民生部）

今年の旭区地域生活支援フォーラムには鶴ヶ峰地区社会福祉協議会会長の佐藤進さんがご登壇くださいます。そこで、鶴ヶ峰地区はどんな町かご紹介いたします。鶴ヶ峰地区は鶴ヶ峰駅を中心に20の町内会、自治会で構成されている旭区でも一番大きい連合自治会です。



鶴ヶ峰駅 近景

旭区には横浜市約2割の障害者施設があります。そして旭区の半分近くが鶴ヶ峰地区にあるというとても障害者施設が多い地区でもあります。

普段から障害のある方々と共に生活をしているので、車いすの方であろうが白杖を持った方であろうが、そういう方々をじろじろと見る住民はまずいません。

自然なまなざしと言ったらよいのでしょうか、そんな対応を感じます。一たび何かあったらさっと駆け寄って助ける方たちの姿を私も何度か目にしています。

横浜気質と言うのはとにかく皆で助け合わなければ生活できなかったことから始まり、関東大震災、横浜空襲を通して、物もなく、頼る人のいない状況下でより強まったのだそうです。（会長・談）

鶴ヶ峰地区はその横浜気質を色濃く残している地域であるといえるでしょう。鶴ヶ峰地区社協の標語は「垣根のない町、鶴ヶ峰」です。目指しているのは障害のある方たちとの共生社会です。共存共栄の共存ではなく共生です。共生とは互いがいなくては困る（親密な結びつきを保ちながら一緒に生活すること）という考え方です。障がい者施設があってもいいというのではなく、ないと困るということです。

それを体現しようと地域住民が努力している町、鶴ヶ峰。そんな町にほっとぽっとはあります。

【赤い羽根共同募金について】

今年も恒例の赤い羽根共同募金が始まりました。ご存じのようにこの募金は地域の福祉のために使われるものです。子どもたち、高齢者、障がい者などを支援する様々な福祉活動や、災害時支援に役立てられます。期間は10月1日から3月31日までの6か月間です。

今年は昨年度同様、感染症対策として声を上げての街頭募金活動はできませんでした。あらかじめ録音された音声を流しての活動となりました。

今年、大きく変わったことは電子マネーによる募金ができるようになったということです。Line Payでの募金が可能になりました。

QRコードを読み取り、金額を設定して送金することで募金が完了します。各区によってQRコードは違います。共に歩む市民の会のある旭区のQRコードを貼っておきます。

もしよろしければこちらを読み込んでご利用ください。ご協力をお願いします。



第82回理事会報告

日時：10月28日（木）18:30~21:00 場所：ほっとぽっと別館

出席者：理事：9名 職員2名

<報告事項>

- ① 令和4年度グループホーム新規設置の応募について
- ② 令和3年度事業計画の執行状況について

<審議事項>

- ① 上期会計報告について

2021年11月~2022年3月 市民の会・ほっとぽっと スケジュール

★ぴあくらぶのつどい 11月16日 12月21日 1月18日

☆ほっとぽっとからのお知らせ

12月29日~1月3日 年末年始休館

ミニ清掃 11月25日 12月27日

旭区地域生活支援フォーラム 12月11日（zoom 配信）

旭区精神保健福祉セミナー 2月~ （YouTube 配信予定）

※常日頃からの法人へのご協力を感謝いたします。

8月から10月までに寄付をいただいた方（敬称略）

金品寄付：伊達和子 / 内田由里子

物品寄付：偕恵園 / 日本基督教団南町田教会 / 松本よね子

日本ケンタッキー・フライド・チキン（株） / 志沢希久子



☆夕食会、ランチのボランティアとして ほっとぽっと開所前からずっと活躍してくださっていた伊達和子さんがボランティアを卒業なさいました。今まで本当にありがとうございました。

編集後記：図らずも地域特集となった62号です。コロナ禍でつながること助け合うことの大切さを実感している昨今、地域とは何かともう一度見直す良いチャンスをいただきました。（國井）